

英語教育の目的と実践例

梶原秀夫

要旨

少子化の時代を迎えて学校経営は非常に難しくなっている。しかしこのような困難な時ほど経営者も教員も学部・学科の教育内容を真剣に検証できる良い機会はないと考えられる。本論文はどのような教育目的と具体的な教育実践をすべきかを明確に論じている。仁愛の心を持った経営者と教育目的を具体的に実践する教員が求められているのである。

0. はじめに

英語教育の「目的」という表現をすると非常に大きな語学教育の目的⁽¹⁾を論じなければならなくなる。つまり言語教育の問題と、その下位区分になる母国語教育と外国語教育の問題、さらに外国語教育の下位区分になる英語教育の問題⁽²⁾、同時に世界共通語としての英語教育の問題⁽³⁾と言うように、これまで筆者がこの紀要論文で主張してきた言語の本質について再び論じなければならなくなる。今回の「実践例」という表現も一見具体的な意味表示で分かりやすいように思えるが、では誰がどのように行った実践例なのかという点でかなり曖昧な面がある。論題は広義の内容なのか、それとも狭義の内容なのかと問われれば後者の内容である。しかも多くの学校経営者に対して学校経営とその教育方法に関して検証を要望する重要な内容を提言している論題であることを予め申し上げておきたい。

では「英語教育の目的と実践例」という表題は具体的にはどのような意味内容で筆者は用いたのだろうか。詳しくは論文の項目1で改めて論じているが、これは非常に重要な学校経営とその教育内容に関係している論題で、大学教員も自分の研究だけをやっているようでは学部・学科の教育は成り立たないことも指摘している。これだけの説明ですぐに論題の意味を理解できる経営者や教員は非常に熟達した教育者であると断言できる。一般的にはこれだけではあまりにも抽象的で何のことも理解するには時間が必要である。とにかくこの論題の根本には卓越した学校経営者と教職員の積極的な協力体制が重要になっていることを推察されたい。

この概要 (outline) の項で少し論じておくと、会社経営も学校経営もまったく同じである

ということである。会社経営の重要な要素はいかに創意工夫して会社名を有名にさせるかである。テレビなどで奇抜な CM の呼びかけをして一時的に人気になる企業およびその製品があるが、しかしそれでその企業が大きく発展するとは断言できない。その理由はその企業の生み出す商品が他より優れたものでなければ消費者は次第に目を向けなくなってしまうからである。美味しい食べ物を提供するレストランは宣伝など全くしなくても自然に有名になる。それは訪れた人々がそこの料理の美味しさを他の人たちに次から次へと伝えるからである。いつの間にかそのレストランは多くのお客さんが行列をなすような有名な店舗へと大きな変化を遂げているのである。

まさに学校経営も然りであって、その学校に入学した学生たちが目を輝かして学ぶようになり、専門的にも他の学校の学生たちより実力が身について、つまり社会に出てからも多くの企業やその他の広い分野から認められるようになれば、テレビや広告ビラなどで宣伝しなくても自然に有名な学校に成長していくものである。再び言い換えるならば、入学した学校が専門の実力をつけさせるためにあれこれと創意工夫したカリキュラムを用意していて、同時に仁愛精神に富んだ学校経営者や教職員が一丸となって入学した学生たちを一生懸命に叱咤激励してくれるような教育環境になっていれば、学生たちは必然的に自分の選んだ学校の教育環境のすばらしさを父母や友人や母校の先生方にあれこれと話すようになり、宣伝などしなくても自然に有名な学校へと発展していくものである。

自分の研究だけでなく学生たちの実力をつけさせるために躍起となって創意工夫した教育実践をしている教師が多ければ多いほど学校は発展していくものである。つまり入学した学生の学力のために常に創意工夫している教師がその学校にどのくらい多く存在しているかが問われているのである。そのような教師がほとんど存在していないならば、それは経営者の経営能力が全く欠けていることを物語っている。学生たちの自立精神をいくら言葉だけで訴えてみても、それを保障するカリキュラムと創意工夫された専門教育が実施されていなければ、学生たちの実力などはつくはずがないのである。

自立とは何か、そしてどのようにして自立できる能力が身につくかを具体的に学校経営者は学生たちに提示し、必死になってそのための教育を学生たちにしてやるのが緊急でかつ重要なことなのである。自立の言葉だけを念仏のように唱えても具体的な実践が伴わなければそれは何の役にも立たないことを認識されたい。もはや言葉だけの自己満足に終わることは許されないのである。入学してきた学生たちに具体的に自立できる方法を示してやるのがどこの学校経営者にも大きな課題になっていると言える。そのような重大でかつ緊急な教育問題を目前にかかえているにも拘わらず、依然として言葉だけの実質を伴わない見かけだけのお粗末な教育環境が続いていると終末を迎えることになる。つまり単位だけ取得させて大した実力もつかないままでトコロテン方式に学生たちを卒業させているような学校経営をしていると、そのような学校は遅かれ早かれ世間の不評を買って入学者が激減してしまい、その結果経営が成り立たなくなってしまうということである。

さらに別の例を示しておきたい。簡単な方法はスポーツで優秀な選手を入学させればすぐにその選手のことをテレビなどで何度も報道されるので必然的に学校名も多くの人々に知られるようになる。毎年行われている全国高校野球などを見ればすぐに理解できるように、すばらしい選手や何度も甲子園に出場し優勝するような学校は、マスコミが大きく宣伝してくれて自然に有名校へと格上げされている。スポーツに優れた才能のある学生が入学して来なくなると偏差値の高い学校というだけではあまり見栄えがしなくなってくるものである。しかし司法試験やその他の学問上で実力のある学生が輩出すれば有名な学校になるのは言うまでもない。すでに有名になっている学校を精査すればすぐに何が特徴になっているかが容易に理解できるだろう。

明確な事実が一つある。有名なスポーツ選手や芸能人を入学させて宣伝している私立の大きな大学やあるいは偏差値の高い国立大学などでの問題であるが、習い事である語学教育で大成功を取めて毎年英語のスピーチ・コンテストで優勝を成し遂げている大学はほとんど無いということである。これは何を物語っているのか、である。語学教育が思うように成功していない証拠である。偏差値やIQが高いから英語がペラペラになるなどという簡単なことではないのである。学生たちによく話してやっていることであるが、縄跳びや水泳や書道などではいくら偏差値やIQが高くて毎日継続した訓練をしなければ絶対に上達は不可能なのである。語学教育はまさに習い事そのものであるので、毎日特訓させるようなカリキュラム体勢とそれを実践する語学教師がどのくらい存在するかで決まってしまうことを認識していただきたい。

まさに学校経営者の経営能力が問われているのである。教育の目的を定めたならばその目的をあれこれといじって変えてばかりいないで、継続して目的を絶えず再確認しながら教育実践を重要視して創意工夫した教育実践をする教師を多く育てるような学校経営をして行くなれば、必ずその学校は多くの学生や父母や学生たちの母校の先生方に認知されて、スポーツ選手や芸能人を入学させなくても必然的に有名な学校に成長していくものである。

次に大学の入試方法について一つ触れておきたい。近年になって大学の入学試験に「AO式入学試験」などというおかしな入試方法が全国の大学で流行ってきている。ある地方の大学では少子化対策で「全国出張AO式面接」という入試方法を思いつき、受験生が大学に入試を受けに来るのではなくて、大学の方が受験生の学校に出張して面接を行うまさに主客転倒の入試方法を始めているのである。とにかく大学の経営が苦しくなっているので大学の方から高校に出向いて、手当たり次第に面接で合格者を出していく作戦のようである。

いずれにせよなぜこのようなAO式入学試験などというおかしな理解しにくい入試方法を編み出したのだろうか。読者諸氏もなぜこのような入試方法を多くの大学経営者はやるようになったのか、またその入試方法でどのような学生を入学させようとしているのかをじっくりと推理して見ていただきたい。同時にそれぞれの大学で実施するAO式の入試問題をよく精査して見ていただきたい。それらの入試問題でどのような学生を選ぶことができるのか。AO式入試ではどれほどの人数の入学者を取ろうとしているのか。その入試問題で入学した学生はど

の専門学科と関係しているのか。受験する学生たちからはその都度入試料金を学校側は取っているのかどうか。例えば100名の AO 式入試を受験した生徒たちから何名の合格者を出しているのか。もっと極端に言えば1000名の受験者がいたら何名の合格者を出そうと学校経営者は考えているのだろうか。別の項目で再度論じるつもりだが、受験料だけを目的にやっている経営者がいたのならまさにこれは詐欺行為以外の何物でもないのである。

ここで再び本論文の「英語教育の目的と実践例」に話を戻すことにする。上記に問題提起してきたように、今回の紀要論文の論題は各大学の学部学科の教育目的は何であるかを再確認することの重要性と、その教育目的を具体化するためにはどのような教育実践を創意工夫すべきであるか、という二つの論点を中軸にして以下に設定した項目ごとに筆者の教育観とこれまでに試行錯誤してきている実践例を提示したい。なお参考文献については、引用も議論もまったく無いのに参考文献をやたらと多く載せている論文がよく見られるが、本論文では教材として使用した教科書以外は何も参考にした文献は存在しないことを予め報告しておきたい。

1. 教育の目的について

概要 (outline) の項目でかなりの内容をすでに述べているが、何事も目的がきちんと位置づけられていないと、そこから派生する下位区分に様々な違いが生じてきて、最後には誤解が誤解を生んで取り返しのできない混乱した状態が生ずるものである。政治問題でも然りで、一国の総理大臣がヒトラーと同じ戦争犯罪者を神として祭ってしまった靖国神社に何の目的かを明確に提示しないで、ただ単に「心の問題である」などという抽象的で曖昧な目的理由を主張して意地になって参拝を続けているのは悪い例の一つである。世界の常識として独裁者ヒトラーのお墓に参拝するような愚かな大統領や首相は考えられないからである。しかし日本では国粋主義者の総理大臣が近隣諸国や国内の反対を押し切って強引に靖国神社を公式参拝してきたのである。その強引な参拝行為は、8月15日の終戦記念日を静かに心から戦死者のご冥福を祈願しようとしている多数の国民に多大な迷惑をかけてしまい、さらに総理大臣の靖国神社公式参拝を批判した某自民党議員宅に右翼団体の一人が押しかけて放火し割腹自殺の威嚇抗議までさせる結果を招いている。このような言論の自由に対する右翼団体の威嚇攻撃は何十年か前の社会党の浅沼委員長が講演中に右翼青年によって刺殺された事件を思い出させる。一国の総理大臣ともなればできるだけ社会を混乱させるような行動は謹んで、もっと国民の社会福祉の向上や教育環境の改善や近隣諸国との友好的な外交などに専念することの重要性を再認識してもらいたいものである。

さらにその目的が何なのかを推察すれば、自分の主張に反対する者をすべて敵視して二者択一の対立状況を故意に演出し、自衛隊を昔のような軍隊にして軍事力で問題を解決しようとする大国主義的な愛国心を扇動して、世界のどの国とも軍事協力できる集団的自衛権を禁止している平和憲法を改悪しようと画策し、教育問題では教育基本法を戦前の教育勅語的な愛国心を

鼓舞しようとする内容に改悪しようとする国粋主義者の意図が見え見えなのである。しかしそれを見抜けない国民が多いのも戦後の為政者側の歴史をきちんと教えない教育の成果なのかも知れない。前にも述べたことがあるが、「聖域なき改革」などという目的は非常に誤解を生む言語表現で、「聖域」という表現が戦前戦中は「神=天皇」のことを意味し、戦後は国際間の争いは武力で解決することを禁じている「平和憲法」を意味していることを国民やマスコミは深く認識していなかったようである。その結果「改革」という目的の言葉だけが先行してしまい、世の中のすべてが良い方向に改革されていくのだと多くの国民は勘違いしてしまい、郵政民営化の選挙の時を思い起こせばすぐに理解できるように、その本質を見抜けないままに「改革賛成者」か「改革反対者」かという二者択一のレッテルを貼られて、なんだかその目的が分からないけど改革の方がいいと思って多くの国民が自民党に投票してしまっている。まさにその二者択一の政治手法はベテニ師的で国民の目をごまかす詐欺師以外の何物でもない。これを扇動してしまったマスコミにも大きな責任がある。戦前の軍国主義体制を知っている人たちにはぞっとして背筋が寒くなるような社会現象が生じていたのである。国民はやっと遅ればせながらそのことを気づき始めてきているようでもある。マスコミ関係もその点を反省し始めているようである。とにかくあの敵か味方かの二者択一の政治選択の結果国会では与党が圧倒的に多数になり、医療費の値上げを筆頭に社会福祉関係の予算が切り捨てられ、^{あげく}挙句の果てには憲法や教育基本法までが改悪されようとしているのである。郵政民営化だけで投票してしまった結果は、他のもっと重要な生活と生命に関する政治問題にも賛成してしまう結果に結びつく愚かな選択をマスコミと多くの国民はしてしまったのである。

日本の国民は歴史認識をしっかりと教育されていないので、つまりあの独裁者ヒトラーが国民の目をごまかすために社会福祉の改革を唱えてあつと言う間に多くの支持を得て政治上の実権を掌握し、その結果他民族を蔑視した民族優越の純化説で国民の愛国心を扇動して第二次世界大戦へと世界情勢を悪化させてしまったことを日本国民は再認識する必要がある。日本では国民の歴史認識が次第に浅薄になってきている。ここ数年間に多くの国民やマスコミがあのと二者択一の短い言葉にごまかされて愛国心を扇動されてきている怖い状況が生まれている。特に若い世代がそのような傾向にあるのが非常に懸念される。国民のかなりの多くが為政者の意図的に作り出した近隣諸国との緊迫した危機的状況によって愛国心を鼓舞させられて軍事大国の道を志向するようになってきているようである。歴史の歯車を逆戻りさせようとする傾向が急に強まってきているようである。戦後の日本の歴史でこれほどまでにアジア近隣諸国との不仲を増長させた政府は無く、二者択一の短い言葉を駆使して国民の愛国心を扇動すればするほど日本是世界から孤立し、戦前のような軍国主義の自由が侵された社会体制へと逆戻りしてしまう危険な状況になっていると言える。これはすべて政治の目的がどこに向いているかの問題である。どうやら与党の有力な次期為政者も平和憲法と教育基本法を改悪しようと企んでいるように見える。まさに日本の政治と教育の目的がどの方向に向いているかを国民はしっかりと見定めることが重要である。

学校経営においてもまさに然りで、学校がどのような教育目的を持って経営をしているかをしっかりと認識し合っていないと、そこから派生する下位区分の学部や学科の名称も実質の欠けた記号表現だけになってしまう恐れが常に存在しているのである。学校と言えば公立や私立の学校が多く存在している。それぞれの学校にはそれぞれの設立した目的が必ず存在しているものである。重要な問題はその設立目的とその下位区分である具体的な教育内容がきちんと経営者と教員で検証しているかである。

1. 1 学校設立の目的とは

上記に述べたように教育の目的がしっかりと認識されていない学校は、政治の問題で論じたように、その下位区分である教育の具体的な実践でしっかりとしない面が生じてきてしまい、専門的実力がまったく身につかない卒業生を産み出してしまう恐れがある。各学校の設立の目的は千差万別で抽象的な表現が多いが、その学校の学部や学科の設立目的となると具体化された明確な表現になっている。文学部、理学部、工学部、医学部、薬学部、経営学部、教育学部、園芸学部、外国語学部、などの例を見れば何が専門なのか容易に理解できる。学科はさらに具体的な専門教育の名称になっている。学校設立の目的内容はその学校の校風に大きく関係しているはずである。ところがキリスト教や仏教などの宗教を設立目的とした学校は設立当初は目的が明確であるが、年数を経るにつれて増設した学部や学科の多様性から本来の宗教色が薄れてしまっている学校も多い。またスポーツ関係の優れた成績を出すようになると、本来の設立精神から離れた別の特徴の方が前面に押し出されて目立つようになっている学校も非常に多くなっている。その原因はすべて経営上の問題から生じていると言えるだろう。理想よりも経営優先の現実という問題が常に存在しているのである。学校を設立した目的と経営上の現実問題は同時に生起するものであって、一見矛盾しているようであるが経営者の理念が変化しない限り同時に共起できる問題でもある。いずれにせよそれが公立学校であろうと私立学校であろうと、学校に入学者が来ないと話しにならないことで、つまり学校経営が成り立たないと設立の理念などは空念仏に等しいものになっているということである。まさに教育の理想と現実をどう共存させていくかが学校経営者に問われているのである。学校設立の理想的な理念が薄れて行けば行くほど仁愛精神の欠如した経営者が多くなり、その結果管理主義的な教育環境だけが強化されていくことを筆者は警告しておきたい。

1. 2 学部・学科の教育目的とは

世の中には多種の大学が存在していて、それぞれに学部や学科が設置されている。大学での教育ともなれば、それは当然中学や高校段階の内容よりもはるかにレベルアップされた専門教育が内容になっていなければならない。高校と同じレベルの内容を教育しているのでは大学という名前が無意味な存在になってしまうだろう。一般教養という面でも、歴史教育などについてはすでに中学や高校で十分な知識を得ていて、他の国語・政治・社会・地理・生物・化学・

数学などという分野の教育もかなりの知識をすでに受けていると言える。筆者は大学に入ったならば、一般教養などという教科目は全く必要ないと考えている。人間教育が専門教育よりも優先されるべきであるなどという意見をよく聞くが、それは人間教育が一般教育で行われると誤解している方々がよく主張する意見である。それは大きな間違いである。人間教育は専門教育の中でも、また社会のあらゆる場面でも行われているものである。筆者がこれまでに論述してきた「人間＝言語＝集団社会」という理念に関する思考方法を再考していただきたい。

この点最近では一般教養の教科目を2年間もやっているような大学はさすがに存在しなくなっている。筆者が大学に入学した頃は教養学部などという名称の学部もあって教養科目が何故か非常に重要視されていたようである。最近ではこのような学部表現をすると、つまり教養学部などという名称は、今さら何が教養なのだと感じてしまい、非常に違和感を覚える。いくらその下位区分に様々な学科名を設置しても、それはすべて上位区分が教養学部となっているので、専門という範疇に入れることは理論上矛盾していて、下位区分は内容が教養以外の何物でもないと言える。

教養科目がいかにつまらないものであるかの例をここで示すことを許されたい。これは国立大学の例であるが、大学を卒業するためには一般教養科目を何単位か履修しなければ卒業できなくなっていたので、筆者は仕方なくいくつかの教養科目の履修届けを提出したのである。今になって改めて思い出してみると、例えば一般教養科目の人文地理の授業ではどこかの崖の地層を見に行ったという記憶だけが残っている。また生物の授業では蛙の解剖をやったという記憶だけである。数学では微分方程式か何かをやったということしか思い出せない。さらにその他の教養科目では何をやったのか全然思い出すことができないのである。しかし自分が好んで覚えた英詩や英語の歌やドイツ語の歌や日本語の詩などは今でもかなり多く歌ったり暗誦できたりするので、授業では学生たちに若い時に記憶することの重要性を示す例として得意になって披露している。

大学は専門学校ではないなどという意見をよく聞くが、そのような意見を述べる方は一般教養的な科目を教えている教員に多いようである。大学は専門学校以上に専門を学ぶところであるべきである。最近は入学試験問題も作成できない大学があるようで、塾や専門学校の教員に入試問題の作成を頼んだりしている場合もあると耳にするが、意見を聞くのは良いが作問までしてもらうなどとはとんでもないことである。入試問題も作成できないような大学は存在しなくても結構である。

2年間も教養と称する科目を勉強させられるのは時間の浪費であって、専門の授業をその分増やした方がずっと効果的な大学教育であると言える。しかし論文や手紙や報告書やその他の日本語の表現方法を訓練させるための日本語表現などという科目は、一般教養科目という位置づけではなくて、むしろどの専門科目にも必修科目として設置すべき教科目であるかもしれない。とにかく学校設立の目的が理想的または抽象的すぎて世間的にもあまり理解されていないのが現状ならば、その下位区分でもある学部や学科の教育目的をじっくりと検証する必要がある

る。それは非常に具体的な学部名や学科名として検証しやすいからである。

そこで具体的な例として、「外国学部・英語コミュニケーション学科」という専門のコースを設置している大学があるとすれば、その学科の教育目的は一体何を指しているかと読者諸氏はお考えになるであろうか。その教育目的がしっかりと位置づけされていなければ、そこで教育する教員たちはそれぞれの専門分野の授業をするだけになり、またそこで学ぶ学生たちも卒業単位に必要な科目だけに目が向いてしまい、大した専門知識も身につかないままに卒業していくことになるだろう。この問題を論ずる前に再度項目を立てて例の AO 式入試問題に少し紙面を割かせていただきたい。

1. 3 AO 式入試方法とは

すでに概要 (outline) の項で問題提起をしているが、この入試方法は一体何が目的で実施されるようになったのだろうか。各大学には学部や学科がきちんと設定されていて、それぞれの専門の教育を目的としているはずである。例えば体育を専門とする学校や学部や学科ならば体育の素質のある学生を選ぶ入試方法を考えればいいのである。芸術関係を専門とする学校や学部や学科ならばその分野での才能のある学生を選ぶ入試方法を創意工夫すればそれでいいのである。ではそれ以外の学部や学科などはどのような入試方法を考えるべきであろうか。それは従来行われてきている教科目の実力を測る一般入学試験問題のような方法で十分である。語学を中心とした学部ならば語学に関する入試問題の比重が多くなるのは当然である。理工系の学部ならば数学や理科や物理などの関連した入試問題が多く出題されるのも当然である。

それでは体育などに関係した学部や学科を全然設置していない大学がなぜ芸能人や野球選手や卓球選手やスケート選手など体育系のすでに有名になっている学生を躍起となって入学させようとしているのであろうか。このような体育系で素質のある学生を獲得しようとしているのはほとんどが私立大学である。入学試験もきちんと受けさせないで宣伝になるからという理由だけで生徒を入学させてしまい社会的に問題になったことがある。簡単に体育系の有名な素質のある学生を入学させることができなくなってしまうと、必然的にスポーツ関係の行事で学校名がマスコミに取り上げられなくなってしまうので、特に大きな私立大学は困っていたのである。このような状態が続くといくら伝統的に有名な私立大学でも次第に影が薄くなってしまいう運命にある。語学の教育がすばらしくて毎年スピーチ・コンテストで優勝者を産出しているような大学には簡単にはなれないからである。司法試験の合格者数が最近新聞紙上で報道されているが、そのような事柄でも有名になることは経営上重要なことである。とにかく私学経営者はあの手この手で絶えず学校の名前を宣伝しようと考えざるを得ないのである。テレビなどでよく出演している評論家たちがすぐにどこかの大学で雇われて教授や講師や客員教授などになっているのもその例である。

いずれにせよスポーツ関係で名前が有名になるような選手を入学させるのが学校を有名にするのに一番手っ取り早いと言えそうである。しかし入学試験を他の学生と同じようにやらな

れば世間から批判を受けた過去の例があるので私学経営者は非常に頭を悩ませていたのである。そこで思いついたのがこの AO 式入学試験の方法である。一般の入学試験をきちんと受けなくても一芸に秀でている才能がある学生は面接だけでも入学できるような方法を編み出したのである。もはや学部や学科に体育系の教科目など存在しなくても関係なく、ひたすら学校の名前がマスコミに多く取り上げられるようなスポーツ選手や芸能人を獲得すればマスコミが大騒ぎしてくれて、多額の宣伝費を支出しなくても簡単に大学名を宣伝してくれるので、学校側にとっては大きな利益を産出できるのである。しかも一芸に秀でた能力のある学生を見出すための AO 式入学試験などと称して入学させれば、立派な入学試験をやっているように思われて、世間からの批判も皆無になるであろうと考えた苦肉の策なのである。さらに面接だけではちょっと体裁が悪いと思うと、面接以外に小論文を書かせたり、その他あれこれと試験内容を増やしたりして AO 式入学試験問題を作成するようになってきているようである。どこかの大きな私立大学の経営者がこのような入試方法を編み出したところ、なんとここ数年の間にあっという間に日本全国のどこの私学でも AO 式入試方法を採用するようになったのである。

最近ではなんと大学側が高校に出張して学生の面接を行ったりしているという新聞報道を見ると、日本の教育の現状はもはや学校設立の理念や学部学科の教育目的などという理想的なことは現実的に追求できなくなり、教育理念よりも経営を優先する学校運営が一段と強まってきていると言える。しかもこの AO 式入試方法は非常に限られた人数しか入学させない方法で、すでに前の項で指摘したように入学志望者から入試料金をその都度納入させているとするならば、これはかなり詐欺行為に近い入試方法だと言えるだろう。

この AO 式入試方法をよく検討してみると、スポーツや芸能を目的とする学部や学科を設置している大学ならばかなり理解できる入試方法である。しかしそのような教育目的を全然持っていない大学ならばなぜ AO 方式の入試を実施するのかを再検討する必要がある。一般入試や推薦入試などを行っている大学の学部や学科は、AO 式入試方法などしなくても、それらの入試方法でいくらかでも才能のある学生を獲得することができる。例えば工学部や経営学部や外国語学部などというように普通の学部では従来行っている一般入試や推薦入試で能力のある学生をいくらかでも入学させることが可能である。つまり AO 式入試方法などは全然必要ではないのである。それなのに無理に AO 式入試方法を採用したりすると、どのような内容の AO 式入試問題を作成したらいいのか非常に困った状況が生じていると推察できる。面接などしなくても従来の入試方法で十分に能力のある学生を入学させることが可能であるのがその理由である。それとも従来の入試方法では能力が無くて合格できないような学生を入学させようとする学校経営者の企みなのであろうか。

筆者はこの AO 式入試の面接をすでに経験している。大学の学部・学科が語学教育を目的としているのに、この入試方法では英語のテスト以外に自己推薦のための 5 分間の発表 (presentation) が設定されているので、受験した生徒たちは必死で自分の性格や書道や楽器演奏や他のクラブ活動で活動してきていることを一生懸命に訴える準備をしてきている。さらに一

時面接に受かると次は二次面接でグループ討論をさせて合格者を決めるなどという選択方法を工夫しているのであるが、実用的な英語教育を専門とする学部・学科が本当に入学させたい生徒は、語学の実力が普通よりも優れていてさらに語学に対する勉強意欲が強い生徒であるので、果たしてこのような入学試験方法に多くの時間や労力を費やすべきなのかは疑問である。

他大学でも同じような内容のAO式入試方法を躍起となってやっているに違いない。高校生たちのAO式入試方法を受けた理由を面接で質問すると本音は「一つでも入試を受ける機会を多くして早く入学を決めたい」とか「周囲の仲間が受けているので落ち着かなくなり受けてみた」とか「直接自分の性格や得意な面を訴えて一般入試などよりも少しでも有利にしたい」とか「推薦入試の資格を高校側からもらえないのでオープンキャンパスに何度も参加したり、このAO式入試を受けたりして名前を覚えてもらいたい」などのような内容の答えが返ってきている。特に成績の悪い生徒が持参した資料を示しながら必死で自分を宣伝する姿を見ていると可哀そうになってきて入学させたい気持ちが湧いてきたりする。このAO式入試方法は試験をする方にも試験をされる方にも一種の悲哀が生じているとも言えるだろう。それで結局は合格しないのであれば生徒たちの3万円以上の入試料金は無駄になり、このような受験者が多くなればなるほど学校経営者側はぼろ儲けする仕組みにもなっているのである。私立の大きな大学であればあるほど受験者が多くなるので入試料で大金を儲ける仕組みになっていると言っても過言ではないのである。

以上の現状から判断すると、ここで大切なことは私学経営者も教員もこのAO式入試問題の内容を再検討することである。そうすればAO式入試方法を実施している多くの大学がその学部や学科の教育内容と矛盾した入試内容をAO入試で行っていることに気づくであろうし、またそのAO式入試方法はその大学の教育の理想とはすでにかげ離れてしまっていて、ただ単に経営上の問題にだけ関係していることにも気づくはずである。つまりもっと改善して理想的な理にかなった入試方法を工夫する必要があることを強調したい。

1.4 教育目的とカリキュラムの関係

学校の設立目的や学部・学科の教育目的が非常に重要であることは誰でも容易に理解できることであるが、その具体的な教育方法については認識を欠いている経営者が多いようである。すでに述べたように大学入試のAO式入試方法などは現状では教育より経営を優先する悪い例の一つであると考えられる。もはや設立当時の理想的な理念などはどこかに吹き飛んでしまい、ひたすら経営だけに目が向いてしまっている学校経営者が増えているのが現状である。AO式入試はもっと改善しない限り真の教育目的のための入試方法ではないことはすでに論述した通りである。

どの大学もその学部・学科の名称を見れば容易に教育目的が理解できるが、それでは実際にその教育目的がどのように具体化されているかという点では受験者にも父母にも高校側にも曇りガラスのように見えにくくなっている。ではどうすれば曇りガラスを透明ガラスにして教育

の具体的な中身を70%くらいは見抜くことができるだろうか。それは各大学の学部・学科が提示しているカリキュラム（curriculum：教育課程）を見ればすぐに具体的な教育方法を見抜くことが可能である。大学の志願者が何十倍も多くいた時代は、いくら曇りガラスの教育方法を行っていても経営には大きな影響もなく学校側は志願者を入学させるのに困っていたほどである。しかしそのような良き時代はすでに過去の産物になってしまい、今や少子化の時代を迎えて受験者側の方が好きな大学を目指せるようになってきている。そういう少子化の時代を迎えると経営者も教員も安閑とはしていられなくなり、経営者も教員も相互に協力し合って透明ガラスの具体的な教育方法を実践して行かなければならない現状を迎えているのである。

最近になって第三者評価などと称して相互の学校でその経営と教育の内容について検証し合う動きが高まってきている。教育内容を改善するという名目はすばらしいことで、そのような相互に検証し合う機関が設置されたことは喜ばしいことで誰も反対することではない。しかしともすると経営者側が教職員に対して教育以外のまるで会社のセールスマンのような労働をも強制させて、逆に教育環境を悪化させてしまう恐れがあることを強く警告しておきたい。

経営者自身も教職員や学生たちによってその経営方法を厳しく評価されなければならない。そうしなければ望ましい開かれた学校経営とは言い難く、陰険で管理だけを優先する曇りガラスの教育の場が増えてしまう結果になるであろう。経営者に対する評価方法は、例えばその学校の経営者は仁愛精神に富んだ人徳のある経営者なのかどうか、また同時に教職員や学生たちの意見も日頃からよく聞いて活かしてくれているのかどうか、さらに学生の実力がきちんとつく教育環境を絶えず追求する経営能力に優れた人物であるのかどうか、などを同時に評価し合うことが非常に重要である。

労働条件を悪化させるような経営者は必ず墓穴を掘ることを再認識する必要がある。つまり労働条件と教育条件を悪化させていくと、それは必然的に教職員の労働意欲を阻害することになり、同時に学生たちの勉強意欲をも阻害させてしまう結果を招くのである。そのような管理主義的な学校経営をしようとしている大学があるならば教職員側や学生側は断固として教育条件や労働条件の改善のために戦う必要がある。また経営者側もそのような教育環境の改善を訴える運動が起きたならば、それに対抗措置を取るのではなく、経営者側の気づいていなかった問題点を指摘してくれたことに感謝してむしろそれを喜んで受け止める大きな心を持った寛容的な姿勢をとる必要がある。言うまでもなくそれは学校の発展のために重要なことだからである。もし経営者側が好き勝手に管理主義的な経営を続けようとするならば、それは結果的に必ず活気の無い教育環境を産み出してしまい、最後には廃校路線を目の当たりにしなければならない最悪の状況に追い込まれる恐れがあることを経営者側は肝に銘じておく必要がある。このような少子化時代を迎えた今こそ経営者側も教員側も教育の目的のために協力し合って何が一番大切であるかを真剣に検討する時なのである。

上記の懸念を無くすためには、教育目的を実現する方法（=how）を示すカリキュラム（教育課程）の検証が必要である。また同時にその下位区分であると同時に構成要素でもあるシラ

バス (syllabus : 授業細目) の検証も重要である。それは教科目として具体的に何 (= what) を教えるかの検証である。大学のカリキュラム (curriculum) を見れば70%はその学校の教育内容を判断できると前述したが、シラバス (syllabus) を見ればさらに20%追加された具体的な教育内容を見抜くことが可能になる。残りの10%は授業内容のことである。各担当教員がどのような授業方法を実践しているか、また同時に多様な学生たちをどのように教えて評価しているかを検証する必要がある。このように教育目的がどのように具体化されているかを検証することは学校を経営するために非常に重要な問題である。現在実施されている学校間の第三者評価も上述のように70%+20%+10%の検証方法をぜひ採用していただきたい。とにかく経営者も教員も平等に自己点検することが求められているのである。

管理主義的な学校運営は教職員の労働条件を悪化させるばかりでなく、教育環境をも悪化させて、さらに学生たちの学習意欲をも低下させてしまうことを再認識する必要がある。それを怠るとどの学園も人間味の無いもはや設立理念や教育目的とは程遠い内容の建物だけが目立つ存在になってしまうであろう。学部・学科の教育の目的とそれを具体化する教育のカリキュラム (curriculum) やシラバス (syllabus) などの検証が非常に重要であることを問題提起しておきたい。

1. 5 カリキュラムとシラバスの問題点

すでに前項でカリキュラム (curriculum) とシラバス (syllabus) の検証の重要性を問題提起したが、この項ではさらに具体的な例を示して問題点を明らかにしたい。ただらと記述すると読者諸氏には食傷気味になるだろうから読みやすいように項目別に例示することを許されたい。本論文の論題は「英語教育の目的と実践例」である。つまり語学教育に関する内容になっているので、以下に例示する問題点の項目は必然的に語学に関する学部・学科を取り上げることになる。

問題点：

1) 最初に問題提起したいのはすでに概要 (outline) の項で述べているように大学の学部・学科の名称 (=教育目的) に必要な専門教科目の位置づけが適切か否かの問題である。

注釈：極端に言うと学部・学科は専門の教育をする部門なので、筆者が大学の2年間で卒業するために必要な単位を強制取得させられたような従来の教養科目は排除することである。次に重要なのはすでに設置されている専門の教科目が語学教育を専門にする学部・学科ならば実際に語学が上達する内容の教科目になっているかどうかの問題である。語学が専門の学部・学科なのにその核 (core) となる教科目や授業時数が足りなく、単に専門科目に少し関連したような名称の教科目がかなり多くなっているのがどの大学でも目にするのが現状である。以上の2点は非常に重要な問題でそれに気づいていない大学がほとんどである。

2) カリキュラム (curriculum) の上でどのような科目を必修科目または選択科目にすべきなのか、これらの科目をきちんと位置づけられていないのが問題である。

注釈：どの大学でも見られる現象であるが、学部・学科の専門科目であるならば、すでにどの教科目も必修にすべきであって、選択科目などは最初から存在してはならないのである。例えば語学教育で一番重要なのは語彙教育である。語彙を増やさない限り読むこと (reading), 書くこと (writing), そして話したり (speaking) 聴いたり (listening) することは不可能である。しかし現実には語彙に関する教科目を選択科目にしてしまっている語学専門の学部・学科が存在しているようである。英語以外の第二外国語は何か良いかなどという場合に初めて選択科目という範疇 (category) を設定すべきである。

3) 外国語学部とはどのような学部であるべきなのかを再認識する必要がある。

注釈：この件については改めて説明しなくても誰でもすぐに理解できることである。しかし日本人にとっての母国語である日本語はどのようにこの外国語学部では位置づけられるべきであろうか。この学部に入学生が入学してくると日本語も彼等にとっては外国語であるのは言うまでもない。また日本人が外国人に日本語を教えたりする場合には日本語はすでに外国語として位置づけられているのである。このことを認識しているかどうかがこの項目では問われていることを再認識されたい。望ましいことは外国語学部という上位区分が設定されれば必然的に下位区分には英語学科, 中国語学科, ロシア語学科, フランス語学科, ドイツ語学科, アラビア語学科, 朝鮮語学科, スペイン語学科, そして日本語学科などというような学科が設置されることを暗示している学部名なのである。しかし経営上の問題で大きな内容の学部名に対してたった一つの学科しか持てない学校もかなり多く存在している。

4) 「英語コミュニケーション学科」とはどのような学科なのかを再認識する必要がある。

注釈：学科名になると非常に具体的になるのが普通である。この項目4の学科名は単に「英語科」とする場合よりも「コミュニケーション」(communication) という表現が追加されて「英語コミュニケーション学科」という名称になっていることに注目していただきたい。読者諸氏は「英語科」と「英語コミュニケーション学科」とはどのように違うと判断なされるであろうか。「英語科」と「英文学科」は前者が語学に焦点が当てられていて後者は文学に焦点が当てられていると容易に判断できる。しかし「英語科」と「英語コミュニケーション学科」の相違については簡単なようでいてちょっと難しい面がある。「英語科」というと英会話は当然であるが、「英語学」という教科目も専門的に重要視されていて、「英語史」や「英文法」は勿論のこと「音韻論」や「音声学」などというように非常に専門的な学問を学ぶ学科であると言える。それに対して「英語コミュニケーション学科」は「英語学科」のように多様な専門的内容を含んだ学科ではなく、それはもっと具体的な内容であり一口で言えば「英語でコミュニケーションができる学科」ということである。この学科では実用的な英語能力を高めることが一番の教育目的なのである。シラバス (syllabus) の面でも実用的な英語能力を向上させるような教科目とそのための授業時間数をできるだけ多く保障する学科になっていなければならない。4年間もこの学科で授業を受けたならば、学生たちが卒業してから当然会社などで外国人と英語で電話の応対をしたり、外国企業とも英文で手紙の交換

ができたりするような英語能力を身につける学科になっていなければならない。つまり「英語コミュニケーション学科」は学生たちが実用的な英語能力を身につけて自立していけるような教育内容を創意工夫しなければならない学科なのである。では具体的に「英語コミュニケーション学科」ではどのような授業方法を工夫すべきなのであろうか。この件に関しては別の項の中で改めて提示したい。

- 5) 多様な学生の学力という点では、短絡的にすべて能力別クラスの設置でその問題を解決しようとするのではなく、教師側が多様な授業方法を創意工夫する必要がある。

注釈：習い事はすべて能力別で鍛えられるのが90%以上正しい面がある。しかし自分よりも上達している人の方法を模倣しながら実力が向上できる側面もある。つまり見本となるものが身近に存在することがまた上達の条件なのである。またいくら能力別にクラスを分けてみても限界が生じている。極端に言えば2名クラス・3名クラス・4名クラス・5名クラスにしても全員がまったく同じレベルでは有り得ないのですでに能力に差があることになる。そのような意味で語学などの習い事に関する教科目は、90%は能力別に分けた教育が必要であるがそれだけではないことを教師側が認識する必要がある。ではどのように認識すべきだろうか。読者諸氏ならばどのように授業を工夫なされるだろうか。筆者の場合は毎回の授業では必ず口頭によるミニテスト (quiz) を実施し、質問内容はできるだけ多様にしてレベルの高いものと低いものを出しながら学生たちに出来るだけ多く答えられるように工夫している。

- 6) 各専門教科目の授業内容であるが、例えば実用英語を目的とする「英語コミュニケーション学科」ならば、その授業内容が実用英語をきちんと上達させるように工夫されて授業が実施されているかどうかを検証する必要がある。

上記の問題点をよく理解できない読者諸氏がいると困るので、具体的にいくつかの専門の教科目を取り上げて、その教科目の望ましい授業方法とはどのようなことかをいくつか列挙することを許されたい。

「英語コミュニケーション学科」の授業方法

Speaking： 場面による会話表現を徹底させる必要がある。電話の応答もできないようでは困るからである。

Writing： ビジネス・レターや日記や小論文や手紙などの場面に応じた書き方の訓練を徹底させる必要がある。毎回の授業で添削指導をどう保障するかが重要である。

Reading： 談話文法 (discourse grammar) などを中心に文章 (text) の構造を理解させると同時に語彙力 (rich vocabulary) を鍛える指導方法が必要である。

Listening： 英会話力をつけるには聴解力をどう鍛えるかにあるとも言える。週1回くらいの授業では全然ダメである。教材機器の活用を中心に毎回「聞き取り」(dictation) の課題を出して強制的に聴解訓練をさせる必要がある。

Vocabulary Building： 語学教育で一番重要な語彙力をどのようにしてつけさせるかで

ある。他の専門教科目でもこの点を最重要視しなければならない。特に場面に応じた単語や慣用句などは徹底的に習得させる必要がある。この科目は選択ではなく必修にしなければならない。

ビジネス英語： このような専門科目も必修にする必要がある。あまり必要としない教養科目などを減らせばもっと実用的な専門教科目を増やすことが可能である。特にビジネス・レターなどはこの教科目の中で大いに鍛える必要がある。

時事英語・新聞英語： 英字新聞を読めるようになるためにはかなりの語彙力を必要とする。インターネット時代を迎えて世界情勢を早く把握できるためにもこの教科目は必修科目であるべきである。

国際情勢： この教科目は上記の時事英語・新聞英語に大きく関係している科目であって、授業内容は当然英語力がつくように工夫されなければならない。教材は時事英語の新聞や雑誌の活用が当然必要である。あえて必修にする必要のない教科目である。日本語で国際情勢を語るのなら日本語の新聞を読めば間に合うことである。

異文化コミュニケーション： 近年になってこのような表現が非常に多く使用されるようになってきているが、この表現の意味をきちんと理解しているのかどうかは疑問である。コミュニケーション (communication) の意味は「伝達」である。「異文化」の意味は文字通り「異なった文化」で、つまり「異なった民族の文化」(=「自国とは異なった外国の文化」) ということである。さらに言い換えるならば、自国とは異なった国の文化を伝達し合うことである。まず自国の文化をよく認識して外国人に説明ができなければならない。それも実用的な英語教育を目的とする学科ならば当然のこととして英語で日本の文化(茶道・華道・柔道・相撲道など)を説明できるように授業で特訓させる必要がある。日本語で他国の文化がどうのこうのと講義するような教科目ではないのである。すべて英語の資料を使用して英語で発表 (presentation) させたりする授業方法を工夫する必要がある。

地域研究： 地域研究とはまさに地域に関する研究である。どのような地域であるかという研究である。その地域の民族や文化についての研究である。例えば米国のボストンという地域を研究するならば、当然その地域の歴史や人文地理などについても理解を深める必要がある。ボストンを訪れた観光客にあれこれとガイド (guide) になったつもりで英語で説明できるような授業方法を工夫する必要がある。とにかく英語を使用するような授業にしないと講義だけの授業になってしまって、実用英語を目的とする英語コミュニケーション学科には全く必要でない単なる教養科目になってしまうということである。その教科目をどのように語学教育として位置づけた授業を工夫するかが常に問われているのである。

日本語表現法： 敬語や丁寧語などの多い日本語に関しては、話し言葉や書き言葉の面で多種の場面における日本語表現方法をきちんと学ぶ必要がある。この教科目は必修科

目にすべきである。日本語も外国語の一つであることを認識されたい。

コミュニケーション概論：このような教科目は教養科目にも入らないまったく無意味な講義課目である。必修科目などに絶対すべきではない教科目である。概論ではなく方法論ならまだ位置づけられる面もあるだろう。いずれにせよこのような教科目を必修にして他の重要な英語必修科目の時間を邪魔しないことが大切である。

情報処理：この教科目は語学関係とは直接関係がないが、IT時代の社会に巣立っていく卒業生は情報処理関係の技能は十分に身につけてもらいたい。語学と情報処理を駆使できることは即自立できることであり、企業もそのような実用的な能力を持っている卒業生を欲しているのである。その意味でもこの教科目は必修であるべきである。

第二外国語：英語以外の外国語の知識も必要である。能力のある学生ならば英語以外の外国語も使用できるようになりたいという要求もかなり強いと考えられる。そのような学生たちのためにも選択科目として初級・中級・上級まで学べるようにすることが重要である。

その他の教科目：英語教師になるための教科目、経済に関する教科目、人間の心理に関する教科目、社会の法律に関する教科目、などこれらの教科目は概論ではなくて実用的な内容の授業を行う必要がある。英語教師になるために必要な教科目はその分野を志望する学生は必修で履修しなければならない。特に職業分野でのコース制をカリキュラムに導入すれば必修科目の内容もその都度変化してくるのは当然のことである。とにかく概論的な内容の授業はできるだけ避けて、いかにより実用的な内容の授業を実施するかが問われているのである。その意味でも大学では蛙の解剖をしたり崖の地層を見に行ったりするような教養科目の授業は全く必要ではないと断言したい。

以上あれこれと論述してきた内容は学部・学科の教育目的とそれを具体化するカリキュラム (curriculum) およびシラバス (syllabus) の問題点であるのをご理解していただきたい。実用英語を教育目的とする「英語コミュニケーション学科」という教育の現場に必要なことは真の語学教師が何名存在するかである。大学はそれぞれの分野の研究者が存在する教育の場ではあるが、各学部・学科の教育の目的にふさわしい教員がどのくらい存在するかが重要なのである。「英語コミュニケーション学科」はより実用的な英語力を養成する学科である。教員は自分の専門の授業をしているだけでは役に立たないのである。自分の専門の教科目の中でどのようにしたら学生の語学力が向上するかを絶えず検証する必要がある。上記の問題点ではそのようなことを厳しく指摘している内容となっていることを再認識してもらいたい。紀要論文などでもそのような実践例が多い論文を数多く紹介してもらいたいものである。筆者のこの問題提起を日本全国の大学教員が大きな心で厳しく受け止めるよう切望する次第である。次の項では筆者の具体的な授業目的とその実践例をいくつか紹介することを許されたい。

2. 英語教育の具体的な実践例について

ここでは全国的な英語教育の実践例を例示するのではなく、これまでに筆者があれこれと試行錯誤をしながら取り組んできた実践例をいくつか紹介することにしたい。

2.1 授業目的と実践例

実践例の教科目は「英米演劇」, 「Writing」, そして「Vocabulary Building」の3つである。以下は紙面を割いて誠に恐縮であるが、大学のシラバス (syllabus) に掲載している内容をそのまま提示することを許されたい。筆者の授業目的は、まずどのようにしたら学生たちの語学力を向上させることができるか、次にどうしたら学生たちに授業に対する興味を抱かせることができるか、そして最後はその授業の中でどのようにして人生の教訓を学び取ってもらえるか、などの3点である。「英語特訓教室」と称して学生たちを厳しく指導するようにしている。以下は3教科目のシラバス (syllabus) とその注釈である。

[英米演劇] (短大: 『My Fair Lady』)

- 授業内容
- 1) 実力をつけ自立した女性を目指す。
 - 2) 英会話力の基本訓練と位置づける。
 - 3) 脚本と映画字幕の訳語の適否をチェックし読解力をつける。
 - 4) 毎日 sound track の英語のシャワーを浴びて英会話力を高める。
 - 5) 多くの詩とメロデーを覚え自分の人生をより豊かにする。

- 授業計画
- | | |
|----|--|
| 4月 | ★授業内容・評価などについてのガイダンス
★レポート提出 (George Bernard Shaw の経歴)
★ Video (日本語字幕) の鑑賞 (2週)
★ Soundtrack の dubbing 完了
★ Video (英語) の鑑賞開始 |
| 5月 | ☆個人台詞読みテスト開始
☆ Video (英語字幕) 学習の同時進行 |
| 6月 | ★個人台詞読みの終了
★グループ台詞読みテスト (第1回) 開始
★ Video (英語字幕) 学習同時進行 |
| 7月 | ☆グループ台詞読みテスト続行
☆ Video (英語字幕) 学習続行
☆意訳 (free translation) テスト実施 (P.1-P.100) |
| 8月 | ♪♪ (夏期休暇) ♪♪ |

- 9月～10月 ★グループ台詞読みテスト終了
 ★ Video (英語字幕) 学習続行
- 11月 ☆グループ台詞読みテスト (第2回) 開始
 ☆ Video (英語字幕) 学習続行
- 12月 #パフォーマンステスト・早口読みテスト開始
 #グループ台詞読みテスト続行
 # Video (字幕なし) 鑑賞開始
- 1月 ★意識 (free translation) テスト実施 (P.101—P.152)
 ★ Video (字幕なし) 鑑賞終了
 ★グループ台詞読みテスト終了

評価方法 1) 出席テスト (無欠席で全ての課題を終了した場合80点以上を評価) 2) レポートテスト 3) 個人台詞読みテスト 4) グループ台詞読みテスト 5) 意識テスト 6) 早口読みテスト 7) パフォーマンステスト 8) 口頭即答テスト

テキスト Alan J. Lerner 脚本 『My Fair Lady』 英光社

注釈

筆者はどの担当教科目の授業目的にもどうしたら自分で食べて行けるか、つまり「自立」という言葉の意義を最初に必ず説明するようにしている。これは英語が専門の学科で、あるので英語で飯が食っていけるように努力しなさい、ということを強調するためである。その際にIT時代の世の中なので情報処理についてもソフトを使いこなせるようにして、さらに外国人に日本語も教えられる能力を身につけると完全に自立できることを学生たちに強調している。

評価方法として上記に8項目列挙してあるが、学生たちには以下のように説明された配布資料 (handout) を毎回配っている。

- 1) 出席テスト： 健康で規則正しい生活を送り、無欠席ですべての課題を終了した者には最低80点の評価を受ける資格が与えられます。年間の欠席 (=さぼり) は2度までしか認めない。病気や事故などの場合は欠席 (=さぼり) と見なさない。また後日定められた日時に研究室で自習すれば欠席は取り消すことも可能です。
- 2) レポートテスト： この戯曲は George Bernard Shaw の喜劇『Pygmalion』が原作であるので、原作者はどのような作家であるかをレポート提出するテストです。
- 3) 個人台詞読みテスト： 各自の指定された範囲のテープを何度も聞いて音読による猛訓練を行い、役者と同じスピードで、しかも感情もこめて、ラジオドラマの声優になったつもりで脚本を読むテストです。
- 4) グループ台詞読みテスト： 指定された範囲を今度はグループで役割を分担してラジオドラマの録音をしているように音読するテストです。
- 5) 意識テスト： 直訳では意味が通らない箇所を意識するテストで前期と後期に1度ずつ行います。

- 6) 早口読みテスト： 指定された箇所（歌詞の中で早く歌う箇所）を早口で1つも間違えないで読み切るテストです。
- 7) パフォーマンステスト： 自ら女優になったつもりで、一番好きな場面を演ずるテストで友人の助演も可能です。
- 8) 口頭即答テスト： 語彙力をつけさせることを基本にしているテストで、学生一人一人に質問したりするが、レベルの上位の学生たちのためには「早押しクイズ」のように早く手を上げた学生に点数を与えたりしている。

※以上の特訓をすれば、1年間で美しく輝いた女性（=人間）に成長でき、英会話の実力も身に付き、自立への道が開けてきます。自分を甘やかさないでがんばってください。

以上が評価方法の説明であるが、台詞読みテストは録音しておいて学生たちにフィードバック（feedback）させている。上手に台詞読みをこなす学生やグループがいると教室内は静まり返って発表（presentation）が終了すると同時に大きな感動の拍手が自然に沸きあがる。上手な発音をする学生をスピーチ・コンテストに出場させて並み居る他大学の代表者たちに勝ち抜いて全国優勝させたこともある。この授業は視聴覚教室で実施させてもらっている。特にパフォーマンステストでは最初は恥ずかしがってしり込みしている学生がいるが、他の学生が次々と舞台上でパフォーマンスを終えるに従ってやる気が出てきて最後には全員が参加するようになる。学生たちの中には最初は嫌がったりしている者もいるが、練習して演じきった後の快感を味わうと自分に自信が出てきて、もう一度やりたいなどと言うようになりこの授業は自己変革のための大きな訓練の場にもなっている。

台詞読みテストはスタジオでドラマを録音しているように喜怒哀楽の気持ちを出して、英語母国語話者（English native speaker）と同じ速度で話せるまでサウンドトラック（sound track）を聴いて猛練習をさせている。

またグループ台詞読みテストで高得点を受けると個人の時よりも一段と喜びが大きくなっているようである。彼女たちの人生においても忘れられない思い出になっていると確信している。特にこの映画『My Fair Lady』はミュージカル（musical）になっているので、よくテレビやラジオで流れてくる有名なメロディ（melody）は英語で歌えるようにテストも行っている。

この授業を始めた頃は「立体的授業」という表現をして大学の宣伝にもなっていたが、やがては必修科目から選択科目になり、今年度からは語学関係の学科名になった関係で文学関係の教科目は削除されてしまっている。文学関係の教科目でも上記の評価方法を見れば容易に理解できるように、実際は語学教育を基本に据えて授業が行われているので、語学関係の教科目以上の実用的な授業内容になっていると言える。

映画の字幕（caption）の日本語訳はとても上手な表現もあればまったくその反対の下手な表現もある。文脈（context）によってどのような日本語訳が適当であるかを学生たちに考えさせている。また直訳（literal translation）ではまったく意味が通じない英語表現をその都

度指摘してどのような意識 (free translation) が適当かを考えさせている。直訳と意識の違いは一種の慣用句のようなものでかなり興味の対象になっている。

口頭即答テストは毎回行っているテストである。語彙を中心に質問しているが、時々大事な英文を出題する場合がある。筆者のどの授業でも開き直りの意味を表わす「死んだつもりで人生をやり直しなさい」(Just start your life over as though your past didn't exist!) という英語表現は3秒以内で即答できるように特訓される。何度も同じ質問を受けているとほとんどの学生が即答できるようになる。電話の応答で「電話中です」, 「席を外しています」, 「会議中です」, 「外出中です」, 「仕事で出張中です」などの表現をどれも即答できるように訓練させている。

[Writing II] (『日英語対照英作文演習』)

1. 授業科目の目的および概要：

- 1) 本講座は英語と日本語を対照的に学ぶことによって英会話の実力がつき、同時に英作文の実力も向上し、さらに外国人に日本語を教える実力もつく一石三鳥の効果が望める特訓教室です。
- 2) 英語で自己表現ができるようになり、同時に外国人や帰国子女に日本語を教える能力を持つことは自立できる技能を身につけたこととなります。この講座で使用する教本は、日本人の思考表現に必要な日本語表現構造がすべて列挙されていて、しかも例文で日本語表現に対応する英語表現が対照的に例示してあり、練習問題ではすべて英会話文が応用できるように工夫されています。
- 3) 毎回徹底した音声による質疑応答が行われます。
- 4) また人生をより豊かにするために英国の自然詩人と称される William Wordsworth の英詩の暗誦とその詩が主題となっている映画『草原の輝き』の鑑賞をしてもらいます。
- 5) さらに卒業式に歌う「蛍の光」も英語で歌えるようにしてもらいます。

2. 授業内容および授業の配分：

- | | |
|-------|-----------------------------|
| <1週> | 授業内容(目的・指導方法・評価方法)の説明。資料配布。 |
| <2週> | 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。課題確認。 |
| <3週> | 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。課題確認。 |
| <4週> | 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。課題確認。 |
| <5週> | 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。課題確認。 |
| <6週> | 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。英詩訓練。 |
| <7週> | 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。英詩訓練。 |
| <8週> | 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。英詩訓練。 |
| <9週> | 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。英詩訓練。 |
| <10週> | 宿題テスト点検。予習点検。英詩暗誦テスト。課題確認。 |

- <11週> 宿題テスト点検。予習点検。英詩暗誦テスト。課題確認。
- <12週> 映画『草原の輝き』鑑賞（1週目）。課題確認。
- <13週> 映画『草原の輝き』鑑賞（2週目）。感想文提出。
- <14週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。課題確認。
- <15週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。課題確認。
- <16週> 夏休み宿題「自由英作文」点検。予習点検。「蛍の光」訓練。
- <17週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。「蛍の光」訓練。
- <18週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。「蛍の光」訓練。
- <19週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。「蛍の光」訓練。
- <20週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。「蛍の光」訓練。
- <21週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。「蛍の光」訓練。
- <22週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。「蛍の光」テスト。
- <23週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。「蛍の光」テスト。
- <24週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。「蛍の光」テスト。
- <25週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。「蛍の光」テスト。
- <26週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。課題確認。
- <27週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。課題確認。
- <28週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。課題確認。
- <29週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。課題確認。
- <30週> 宿題テスト点検。予習点検。口頭で質疑応答。授業総括。

3. 指導方法： ①学習目的・授業内容・評価方法・注意事項などの説明。②予習用プリント資料・宿題テストを毎回点検する。③毎回口頭によるテストを実施する。④英詩暗誦テストや英語の歌「蛍の光」テストも行う。

4. 以下の項目の日英語対照表現を訓練する：

- [1] 名詞の飾りについての日英語の違い
- [2] 省略についての日英語の違い
- [3] 「～です」形と「～ます」形の日英語の違い
- [4] 「～がある」形と「～がいる」形の日英語の違い
- [5] 「る」形と「た」形の日英語の違い
- [6] 「れる・られる」形の日英語の違い # 英詩 (Immortality Ode: Stanza X) 暗証
テスト # 映画『草原の輝き』(Splendor in the Grass) の鑑賞
- [7] 敬語表現の日英語の違い
- [8] 補助動詞の日英語の違い
- ★夏休み課題：「自由英作文」
- [9] 使役の表現の日英語の違い

- [10] 伝聞の表現の日英語の違い
- [11] 様態の表現の日英語の違い
- [12] 比況の表現の日英語の違い
- [13] 推量の表現の日英語の違い
- [14] 願望の表現の日英語の違い
- [15] 比較の表現の日英語の違い
- [16] 依頼・勧誘の表現の日英語の違い
- [17] 命令・忠告の表現の日英語の違い
- [18] 許可・禁止の表現の日英語の違い
- [19] 義務・不必要の表現の日英語の違い
- [20] 仮定・条件・譲歩の表現の日英語の違い
- [21] 助詞の表現の日英語の違い # 「蛍の光」テスト (卒業式に歌詞を見ないで歌えるため)
- [22] 擬声語・擬態語の日英語の違い
- [23] 詩の表現： a) 俳句の翻訳 (冬休み課題) b) 俳句一句作成

注釈

この Writing の授業は非常に多くの目的を掲げて実施されている。どうしたら自立できるかを授業の最初に話して意欲を出させるようにしている。この授業で使用されている教本『日英語対照英作文演習』の内容を見れば容易に理解できるように、基本は実用的な英会話が上達できるように工夫されている。つまり英会話の表現を特訓する英作文の内容になっている。最初の課 (lesson) では日本語と英語の名詞はどのように修飾 (modify) するかを例文と練習問題も含めて全部英語で即答できる訓練が課されている。また最後の課 (lesson) では世界で一番短い詩とも言われる日本の俳句について認識を深めさせるために松尾芭蕉の『奥の細道』の英語訳を楽しみながら英訳させて、さらに学生たちの自作の俳句を一句提出することになっている。上手な俳句には点数を加点している。以上の2つの課以外はすべて英会話の表現練習となっている。

特に最初の課の名詞の飾りの練習問題では、例えば「テロリストに乗っ取られた飛行機の衝突で崩壊されたニューヨークの世界貿易センターの双子**タワー**」(the twin **towers** of the World Trade Center in New York collapsed from the crash of the airplanes which had been hijacked by terrorists) という長い表現は4秒以内で言えるようなテストを行っている。この長い表現は日本語では「タワー」が核となっている名詞で全部日本語は前飾りであるが、英語の「tower」は前飾りと複雑な後ろ飾りとから成り立っている構造である。学生たちは4秒以内で暗誦する課題は絶対に暗誦 (recite) できないと叫んでいるが、以下のような英文構造を解説して質疑応答 (Questions and Answers=Q.A.) の訓練をさせるとすぐに暗誦できるようになっている： Q. 「どんなタワー？」 (What kind of towers?) → A. 「双子タワー」 (the

twin towers), Q. 「何のタワー？」 (Of what?) → A. 「世界貿易センター」 (the World Trade Center), Q. 「どこの？」 (Where?) → A. 「ニューヨークです」 (in New York), Q. 「どうしたの？」 (What happened?) → A. 「崩壊された」 (collapsed), Q. 「何が原因で？」 (From what?) → A. 「飛行機の衝突で」 (from the crash of the airplanes), Q. 「その飛行機はどうされていたの？」 (What happened to the airplanes?) → A. 「乗っ取られていました」 (which had been hijacked), Q. 「誰に？」 (By who?) → A. 「テロリストです」 (by terrorists)。母校の高校を訪れて恩師に上記の英語をペラペラと言ったら驚いて褒めてもらった学生が結構出てきている。

以前にも別の論文で述べているが、このような質疑応答は英文を文頭から訳読していく方法で、英文速読（読めばいいのではなく同時にきちんと意味も把握しなければならない）のためには絶対に欠かせない重要な訓練方法でもある。また英語の会話能力を高めるためにもこのような英文構造の質疑応答が非常に重要であることを主張しておきたい。

宿題テストとは授業で終えた箇所の表現方法を学生たちが自分で同じ文型の日本語文を作成してそれを英文に訳してくるレポートのことで、毎回この課題を出すので学生たちの英作文を添削する作業が非常に大変である。予習点検とは次回に学習する箇所の練習問題を穴埋め式にヒントを与えて作成した配布資料を順番に発表してもらい、正解者には点数がプラスされることになっている。練習問題は上述の2つの課を除いてすべて英会話の表現になっているので書くだけでなく口頭で言えるテストを行っている。

この教本『日英語対照英作文演習』は日本語の文法構造がすべて理解できるように工夫されているので、この授業でしっかりと学べば帰国子女や外国人に日本語を教えることもできるようになっている。英会話表現と日本語教育が同時に学習できるまさに一石二鳥の授業内容となっている。

さらに学生たちに人生で苦難を味わった時に開き直れるように、筆者の好きな英国詩人 William Wordsworth の詩の一節を暗誦させるテストを行っている。その一節とは「What though the radiance which was once so bright / Be now forever taken from my sight / Though nothing can bring back the hour / Of splendor in the grass, Of glory in the flower / We will grieve not, rather find strength / In what remains behind」という内容で、11節 (stanza) から成る長い詩の第10節目の中のたった6行である。自然に対する独特な哲学観を抱いていた詩人が様々な悩みの中でやっと辿り着いた悟りの開き直りの詩の一節である。米国の有名な Elia Kazan という映画監督がこの英詩に感動して作った映画作品が『草原の輝き』 (Splendor In The Grass) である。筆者は大学時代にこの映画を見て感動し、英詩もその時に覚えたので何十年立っても九九算を唱えるように自然に暗誦できるようになっている。この映画の中では上記の英詩が二度聞こえてくる場面がある。最初は英詩の授業の場面で女主人公はその詩の意味が理解できないでクラス仲間の前で恥をかかされるが、失恋や自殺などの経験を味わった最後にこの英詩の意味を認識するのである。学生たちは英詩の暗誦テストですでにこ

の意味を理解してから映画鑑賞を楽しむことができる。ビデオ映画の放映が終了するとほとんどの学生たちは涙を流して感動している。その映画を見て学生たちが提出した感想文を読みながら筆者も涙を流したりしている。

本大学では卒業式には英語で「蛍の光」(Auld Lang Syne)を歌うのが長年の間慣例となっている。父母の見ている前で歌詞を見ながら歌うのは英語学科の卒業生として恥ずかしいことだからと説明して、短大の2年生と四大の4年生の学生たちには英語で歌う「蛍の光テスト」を実施している。大学の英語科を卒業したのに英語の歌を一つも歌えないようでは恥ずかしいことである。

この授業はすでに上記の説明を読めば容易に理解できるように、従来の大学で教えているような単なる Writing の授業内容とは大きく異なっている。特に教本は日本語の構造と英語の構造がよく理解できるようになっていて、さらに会話中心の練習問題になっているので英会話の特訓にも活用できる便利な教本である。このような英作文の教本は他に類を見ないと言える。利用価値は非常に高いと確信している。しかし残念なことに次年度からは新カリキュラムの中で簡単にこの教科目が削除されてしまっているのを見て筆者は悲しい思いをしている昨今である。他の大学でやっていない特徴のある教科目が失われていくことは本大学の語学教育の大きな損失になるのでないかと危惧するからである。

[Vocabulary Building] (「基本語彙」と「場面語彙」の特訓教室)

1. 授業科目の目的および概要：

- 1) 語学は語彙力をいかにつけるかですべてが決まってしまう。つまり語彙力がないと英会話も英文読解も英作文も TOEIC や TOEFL や英検などの高得点も100%不可能だということです。
- 2) 一つの語彙を習得するということはその語を視覚的に見て意味を理解すると同時に聴覚的に耳で聴いて意味を理解しかつ正しく発音ができることです。
- 3) また語彙は使用度の多い基本語彙といろいろな場面で使用される場面語彙の二つが重要であります。本大学では Vocabulary Test 委員会で長年研究開発してきている基本語彙中心で、会話文で構成されている CD 5 枚付の教本と、さらに場面語彙を中心に TOEIC と英会話と場面語彙が上達できる少し速度を早めて録音された CD 2 枚付 (希望者は 3 枚) の教本を使用して徹底的に特訓する本講座が設定されています。
- 4) 2 年間で 4 回実施される全学 Vocabulary Test も本講座で訓練できるようになっています。
- 5) 本講座では厳しい特訓を受けながら同時に楽しく学べるように前期にはカーペンターズの歌「Top of the world」を覚え、さらにオードリ・ヘプバーンの『麗しのサブリナ』を鑑賞します。後期には同じくカーペンターズの歌「Yesterday once more」を覚え、オードリ・ヘプバーンの『ローマの休日』を鑑賞します。

6) 毎日 CD で英語のシャワーを浴び、英語で自己表現ができるように頑張りましょう！

2. 授業内容および授業の配分：

- < 1 週 > 講座内容（目的・授業方法・評価・全学語彙テスト）の説明。
- < 2 週 > ♪ Eng.Song・語彙テスト前期範囲 1/5 & 過去問の和訳・聴解訓練。
- < 3 週 > ♪ Eng.Song・語彙テスト前期範囲 1/5 & 過去問の和訳・聴解訓練。
- < 4 週 > ♪ Eng.Song・語彙テスト前期範囲・聴解訓練。
- < 5 週 > ♪ Eng.Song・語彙テスト前期範囲・聴解訓練。
- < 6 週 > ♪ Eng.Song・語彙テスト前期範囲・聴解訓練。
- < 7 週 > ♪ Eng.Song・語彙テスト後期範囲 1/8 & 過去問の和訳・聴解訓練。
- < 8 週 > ♪ Eng.Song・語彙テスト後期範囲 1/8 & 過去問の和訳・聴解訓練。
- < 9 週 > ♪ Eng.Song・語彙テスト後期範囲 1/8 & 過去問の和訳・聴解訓練。
- < 10 週 > ♪ Eng.Song・TOEIC 問題の特訓。
- < 11 週 > ♪ Eng.Song・TOEIC 問題の特訓。
- < 12 週 > # 映画鑑賞『「麗しのサブリナ」』（1 週目）用紙配布と内容質問。
- < 13 週 > # 映画鑑賞『「麗しのサブリナ」』（2 週目）感想文提出。
- < 14 週 > ♪ Eng.Song・TOEIC 問題の特訓。
- < 15 週 > ♪ Eng.Song・TOEIC 問題の特訓。

3. 指導方法 前期： ①学習目的・授業内容・評価方法・注意事項などの説明。②前期 Vocabulary Test を目指して特訓開始。③前期の英語の歌・教本の試験範囲の音読と訳読訓練。④前期 Vocabulary Test 受験。⑤ TOEIC 応用問題練習開始。⑥映画鑑賞『麗しのサブリナ』（オードリ・ヘプバーン）。♪♪夏期休暇♪♪

4. 指導方法 後期： ①後期 Vocabulary Test を目指して特訓開始。② TOEIC 応用問題練習続行。③後期の英語の歌・教本の試験範囲の音読と訳読訓練。④後期 Vocabulary Test の受験。⑤映画鑑賞『ローマの休日』（オードリ・ヘプバーン）。⑥次年度 Vocabulary Test を目指して特訓開始。

5. 授業評価方法： 1) 出席テスト 2) ミニテスト 3) Vocabulary Test の成績
4) 追試予習テスト 5) 感想文テスト 6) 英語の歌テスト

6. 使用テキスト・教材など：『Vocabulary Handbook』（朝日イマジン社）。『TOEIC テスト・英会話・場面語彙特訓問題集』（英光社）。その都度プリントされた教材を配布。参考書・その他 英語誌『TIME』（全学 Vocabulary Test にその記事が出題されます）。

注釈

まず初めに授業評価方法について説明させていただきたい：

- ① 出席テスト： テストとして位置づけている。無欠席は80点取得の資格がある。つまり全学語彙テストで600点以上取り、出席が無欠席なら80点獲得できると伝えている。年間3回の欠席は許さないと伝えている。どうしても欠席してしまった学生や授業をサ

ボった学生たちには筆者の別の授業の部屋の片隅や研究室で自習補講させている。

- ② ミニテスト： 毎回全員に出席確認を兼ねて必ず口頭テストを行っている。きちんと予習や復習勉強をしている学生は正解して点数を獲得しているが、英語で質問しているので単語は2度発音してやっているが、勉強しない学生は聞き取れなかったり答えられなかったりする。例の教員に対する「自己点検評価」では勉強しないほとんどの学生が教員に責任転嫁して、復習ではなく復讐の気持ちを高揚させて低い評価点をつけて気を晴らしているようである。親の心子知らず、で困った現象である。
- ③ Vocabulary Test の成績： 600点以上を合格としているが、実際は不合格者がかなり存在する。800点以上は成績点100点をあげている。
- ④ 追試予習テスト： 全学 Vocabulary Test で600点以下の学生は追試テストを受けさせているが、追試テスト範囲は次回の全学語彙テストの範囲の一部から出題している。つまり予習テストである。その理由は次回のテストでもっと良い点数を取ってもらうためである。授業中に行うのですでに600点以上取得した学生たちにも予習勉強をさせる意味で同時に実施している。

「すでに600点以上取っているのになぜ追試試験をやらせるのだ！」などと教員の自己点検欄に文句を書いている認識の薄い学生もいるのでほんとに教育も骨が折れるものである。

- ⑤ 感想文テスト： 前期と後期にそれぞれ2週間ずつ時間を費やして映画鑑賞を行っている。その都度映画の中での英語表現について質問を2・3問必ず出題している。感想文は内容と英語出題問を含めた点数をつけて学生たちに返還している。

現在3コマの授業を担当しているが、演習教科目なのに履修学生は132名、82名、43名という大変な履修人数になっている。新カリキュラムで新年度が始まる寸前に決まった短大と四大の共通科目なので仕方がない側面がある。それにしても100名以上の学生たちの演習授業を行う苦労は半端ではなく、まさに学生たちとの戦いでもある。

厳しくすればするほど担当教員は例の自己点検評価で評価点1とか2の低い評価点を学生側から受ける結果となる。無記名での評価点記入なので、授業中に私語が多い学生や教材を持って来ない学生やすぐに寝てしまう学生や欠席ばかり多い学生などが教員に注意されて怒鳴られたりすると、その学生たちは必ず根に持っていて厳しく指導した教員に対して「うざい！」とか「何の価値も無い授業だ！」など書いている場合が多い。もしこのような問題を批判材料にして教員攻撃を企むような管理体制の強い陰險な学校が存在するならば、すでにその学校は先が見えていると言える。

- ⑥ 英語の歌テスト： 英語科の学生は英語の歌を一つか二つは歌えた方がいろいろな意味で大切だと位置づけてやらせている。筆者も学生時代に覚えた英語やドイツ語の歌をかなり多く覚えている。最近は学生たちと毎年歌っていても歌詞をすぐに忘れてしまうのは年齢が原因である。カーペンターズの歌を前期に一つ後期に一つ覚えさせている。

授業の始まる前に全員でCDを聞きながら歌っている。歌詞は二番まで歌うと点数は倍にしてあげている。

とにかくこの教科目は本大学が自慢できる語学教育の一つで、他のどこの大学もやっていない語学教育の効果的な教育方法である。言語習得 (language learning) とはいかにして語彙力 (rich vocabulary) をつけるかの一言につきると言える。すでに述べたように語学は縄跳びや水泳や習字などのように習い事である。偏差値やIQがいくら高くても、実際に縄を持って飛ぶ練習やプールの水の中に入って泳いでみる練習や筆を持って書いてみる練習を何度も何度もやらないと、100%習い事の上達は不可能である。

文法の重要性をよく主張する人がいるけど、文法以前に語彙があることを再認識してもらいたい。幼時の言語習得で最初から文法を教えるような親は世界中のどの民族にも存在しないと確信している。場面に応じた語彙記号の音声で幼児は何度も聞き取ってその言語記号の意味と場面での発話方法を習得していくのである。

ここで用語の「単語」と「語彙」の相違を確認しておきたい。「単語」(word) という用語を使用するには必ずその上位区分に「文」(sentence) や句 (phrase) があることを認識されたい。「語彙」(vocabulary) は一定の範囲で使用される語の総称または集合である。筆者は文構造 (sentence structure) の中で、例えば「いつの間にか秋になった」(Fall has come before we know it.) という文の中で、「いつの間にか」(before we know it) という副詞句は日本語では単なる副詞句であるのに対して、英語では副詞節になっている。その対照は面白いが、日本語の「いつの間にか」は単なる語彙の一つとして分析したい。英語は4つの単語から成り立っている。筆者が強調したいことは「いつの間にか」(before we know it) という表現は語彙的レベルで習得 (learn) すべきであるという考えである。語彙記号と音声を同時に訓練する語学教育法が、つまり文法 (grammar) よりも語彙 (vocabulary) に重点を置く語学教育法が非常に実用的で重要であることを主張したい。

以上の意味でも語学教育ではこの「Vocabulary Building」という教科目は他のどの専門教科目よりも真っ先に必修にしなければならない重要な教科目であると断言できる。さらに本大学では長年にわたって語彙教育に力を注いできていて、全学語彙テストやそのための教材研究に多くの時間と労力と費用を投じてきている。これは学校経営者と教員仲間の協力があるからこそ実現が可能なのである。長い歳月を経て本大学はこの全学語彙テストを中心に語彙教育の教材研究をおこなってきていて、試行錯誤の結果にやっと英会話力も同時に身につくように開発された教本を2冊使用している。一つは「基本語彙2000語」(使用頻度数の高い語彙) を中心の一つの単語ごとに TOEIC Part II形式の2つの英会話文から成り立つCD5枚付きの教本である。各基本語彙が英会話文になると、さらに別の語彙数も増えて語彙力は一段と増加されるようになっている。2年間で学生たちは合計4回の語彙テストを受けることになっている。もう一つの教本は「場面語彙」を中心として作成された教本である。それは TOEIC テストの聴解問題の訓練ができるようになっていて、同時に「空港」・「ホテル」・「レストラン」・「学

校」・「銀行」・「郵便局」・「デパート」・「病院」・「衣料」などというように「場面」ごとの語彙や英会話が上達するように工夫された教本である。

さらに学生たちの学習意欲を高めさせるために語彙テストで800点以上獲得した学生たちの名前を毎回掲示板に発表している。上位3位までは賞金まで出るようにして学生たちのやる気を起こさせている。700点台の成績の学生たちは非常に悔しがっていて次回には800点以上を目指すと呼んでいる光景を毎回目にしている。また賞金を獲得した学生たちは次回のテストでも獲得しようと目を輝かせている。

3. おわりに

すでに論述してきたように学校教育はその学校の設立した教育理念がどう活かされているかが非常に重要である。さらに重要なことはその学校が大学ならば、その学部や学科の専門教育の目的が実際にカリキュラム (curriculum) や授業内容 (syllabus) で実践的に具体化されているかどうかの問題である。また学校を経営していく場合に教育環境という点で、それぞれの学校の経営者と教職員の関係が相互に仁愛精神で満たされた関係になっているかどうかが大切である。本論文ではこのような問題を指摘し、同時に各大学における学部・学科の専門教育の目的とそれを具体化する望ましい授業方法をどう創意工夫すべきか、を筆者の拙い実践例を祖上に乗せながら読者諸氏に問題提起を試みている。紙面の都合上これ以上の書き込みは迷惑以外の何物でもないので、最後に学校経営者と教職員が相互に協力し合うことによって、日本の望ましい教育環境が大きく発展することを祈願して本論文を終わりにしたい。

(注)

- (1) 梶原 (1997 / 2000 / 2003 / 2004a / 2005a) 参照。
- (2) 梶原 (2005a) 参照。
- (3) 梶原 (2004a) 参照。

参考文献

- Alan Jay Lerner 『My Fair Lady』 英光社
Gary V. Ireland & Hideo Kajiwara 『TOEIC Part 2-format Vocabulary Handbook』 朝日イマジン社
梶原秀夫 『日英語対照英作文演習』 英光社
梶原秀夫 『TOEIC テスト・英会話・場面語彙特訓問題集』 英光社